

P8-4 オーラルフレイルと身体機能・主観的健康感の関連性

○重留 美咲(しげとめ みさき), 稲留 雅仁, 松本 幸子, 森脇 啓司, 濱野 尚子
介護老人保健施設しんあい リハビリテーション部

Key word : オーラルフレイル, 基本チェックリスト, 主観的健康感

【目的】 オーラルフレイルとは残存歯数を含めた包括的な口腔機能、口腔状態の脆弱(≒フレイル)の状態とされており、身体面のフレイル期の前段階に相当すると述べられている。またオーラルフレイルを有すると身体的フレイルやサルコペニア、死亡リスクが増加するとされており、高齢者が増えている現代社会において口腔機能障害を伴う栄養障害や要介護状態を予防するためには、この段階から早期の気づきと対策が必要であるとされている。しかしオーラルフレイルの認知度は低く、口腔機能管理に対する自己関心度(口腔リテラシー)の低下が問題となっている。先行研究ではオーラルフレイルと身体機能の関連性は多数報告されているが、オーラルフレイルを有する者の身体機能と主観的健康感との関連性を報告している研究は少ない。そこで本研究の目的は、地域在住の通所リハビリテーションを利用されている高齢者に対し、オーラルフレイルの有無と身体機能、主観的健康感との関連について検討することである。

【方法】 対象は2018年6月から7月の間で当施設通所リハビリテーションを利用した34名(男性11名、女性23名)で、平均年齢は84歳±7.4歳。全例、長谷川式簡易知能評価スケールが21点以上、FIMの移動項目(歩行)が6点以上であった。調査項目は、握力、10m歩行、Timed up and go test(以下TUG)、Body Mass Index(以下BMI)、主観的健康感、年齢、性別とした。主観的健康感はVisual analog scale(以下VAS)で評価し、0-100mmで自身が感じる健康度の程度にチェックし、数値化した。対象者は、介護予防・生活支援サービス事業利用の適否を判断する際に活用される、厚生労働省が開発した『基本チェックリスト』を用いて群分けし、基本チェックリストの口腔機能項目であるNo.13-15のどれか一つでも該当している者をオーラルフレイル群、該当していない者を口腔機能正常群とした。統計解析はMann-Whitney U検定、名義尺度ではカイ2乗検定を用いて比較し、これらの検定にはEZRを使用し、有意水準は5%未満とした。

【説明と同意】 ヘルシンキ宣言に基づき、各対象者には本研究の施行ならびに目的を説明し、研究への参加に対する同意を得た。

【結果】 オーラルフレイル群24名、口腔機能正常群10名となった。2群比較の結果、オーラルフレイル群は主観的健康

感($p < 0.05$)で有意な低下を認めた。身体機能(TUG、10m歩行、握力)では有意差は認めなかったが、オーラルフレイル群において低い傾向にあった。

【考察】 本研究の結果から身体機能(TUG、10m歩行、握力)に有意差を認めなかったが、サルコペニアの診断基準と照らし合わせるとオーラルフレイル群の握力はカットオフ値を下回っていた。またTUG、10m歩行に関しても高齢者の転倒ハイリスク者選定のカットオフ値を下回っていた。先行研究においても守谷らは、歯の喪失や咀嚼機能の低下が握力や開眼片足立ち時間低下と関連していると報告している。つまり本研究の身体機能(TUG、10m歩行、握力)の結果からオーラルフレイル群では身体機能が低下している傾向にあり、口腔機能と身体機能の関連性が生じていることが考えられた。主観的健康感においてはオーラルフレイル群で有意な低下を認めていた。フレイルは身体機能だけでなく、精神・心理面、社会性といった多面的要素をもっており、主観的健康感においても、身体機能だけでなく精神・心理面、社会性といった要素が反映されていることが示唆された。身体機能と口腔機能は密接に関連しており、このことから理学療法士として、身体機能だけでなく、口腔機能の状態や役割(食べこぼし、むせ、滑舌低下や審美面等)を意識して介入することで不可逆的なフレイルへの移行を遅延または阻止できる可能性があると考えられる。

【理学療法研究としての意義】 オーラルフレイルを有すると、身体機能の低下だけでなく主観的健康感が低下する可能性があることが示唆された。このことから、客観的な運動機能評価による判定だけでなく、主観的な問診調査も併用することにより早期の予防を必要とするサインとなることが示唆される。